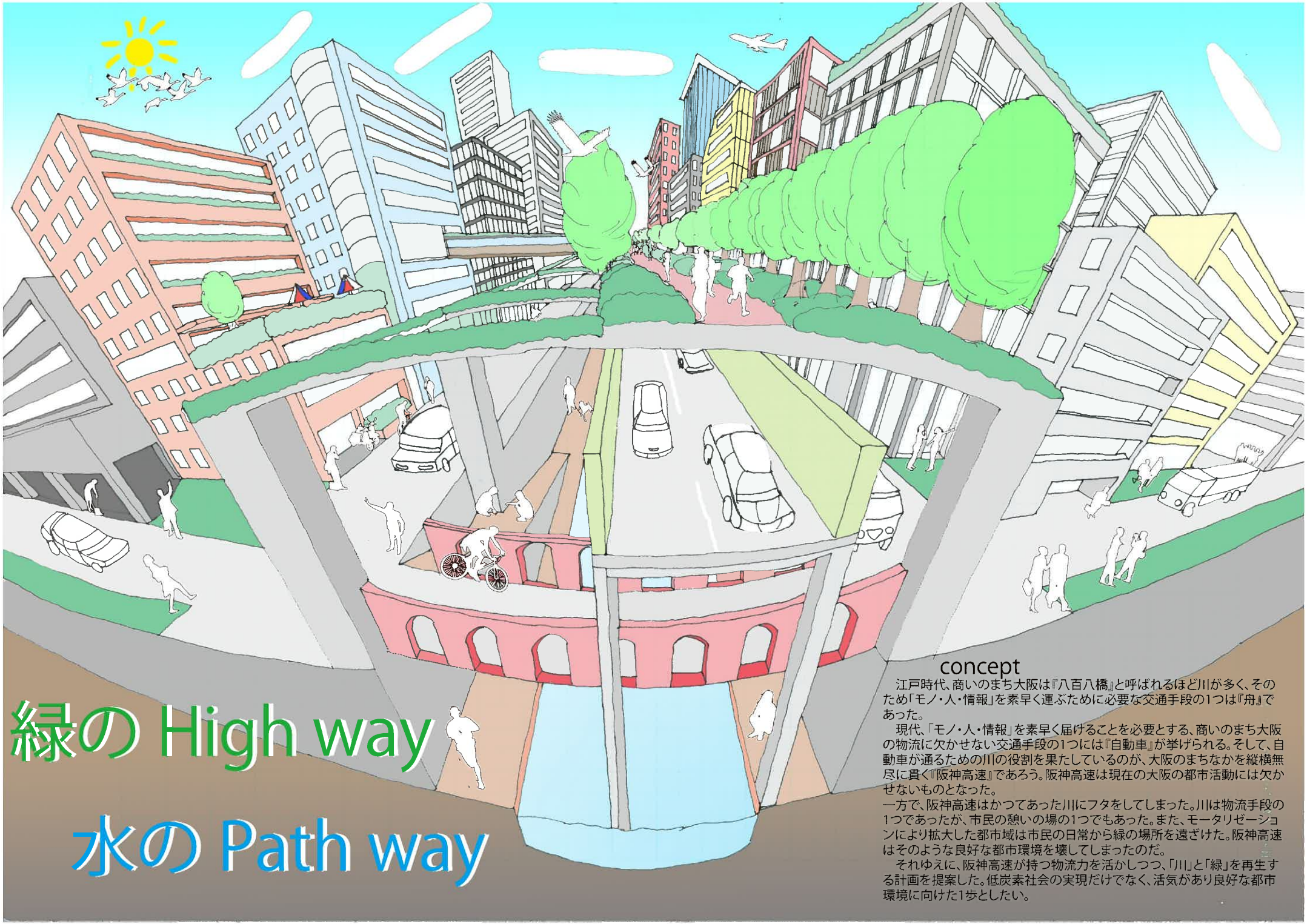


concept

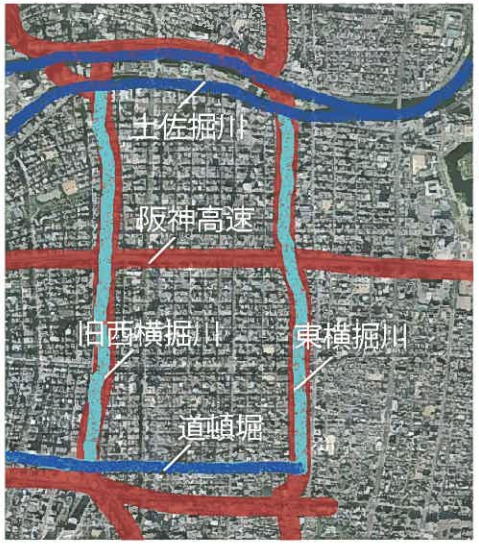
江戸時代、商いのまち大阪は『八百八橋』と呼ばれるほど川が多く、そのため「モノ・人・情報」を素早く運ぶために必要な交通手段の1つは『舟』であった。

現代、「モノ・人・情報」を素早く届けることを必要とする、商いのまち大阪の物流に欠かせない交通手段の1つには『自動車』が挙げられる。そして、自動車が通るための川の役割を果たしているのが、大阪のまちなかを縦横無尽に貫く『阪神高速』であろう。阪神高速は現在の大阪の都市活動には欠かせないものとなった。

一方で、阪神高速はかつてあった川にフタをしてしまった。川は物流手段の1つであったが、市民の憩いの場の1つでもあった。また、モータリゼーションにより拡大した都市域は市民の日常から緑の場所を遠ざけた。阪神高速はそのような良好な都市環境を壊してしまったのだ。

それゆえに、阪神高速が持つ物流力を活かしつつ、「川」と「緑」を再生する計画を提案した。低炭素社会の実現だけでなく、活気があり良好な都市環境に向けた1歩としたい。

■阪神高速高架下の現状



□旧・西横掘川

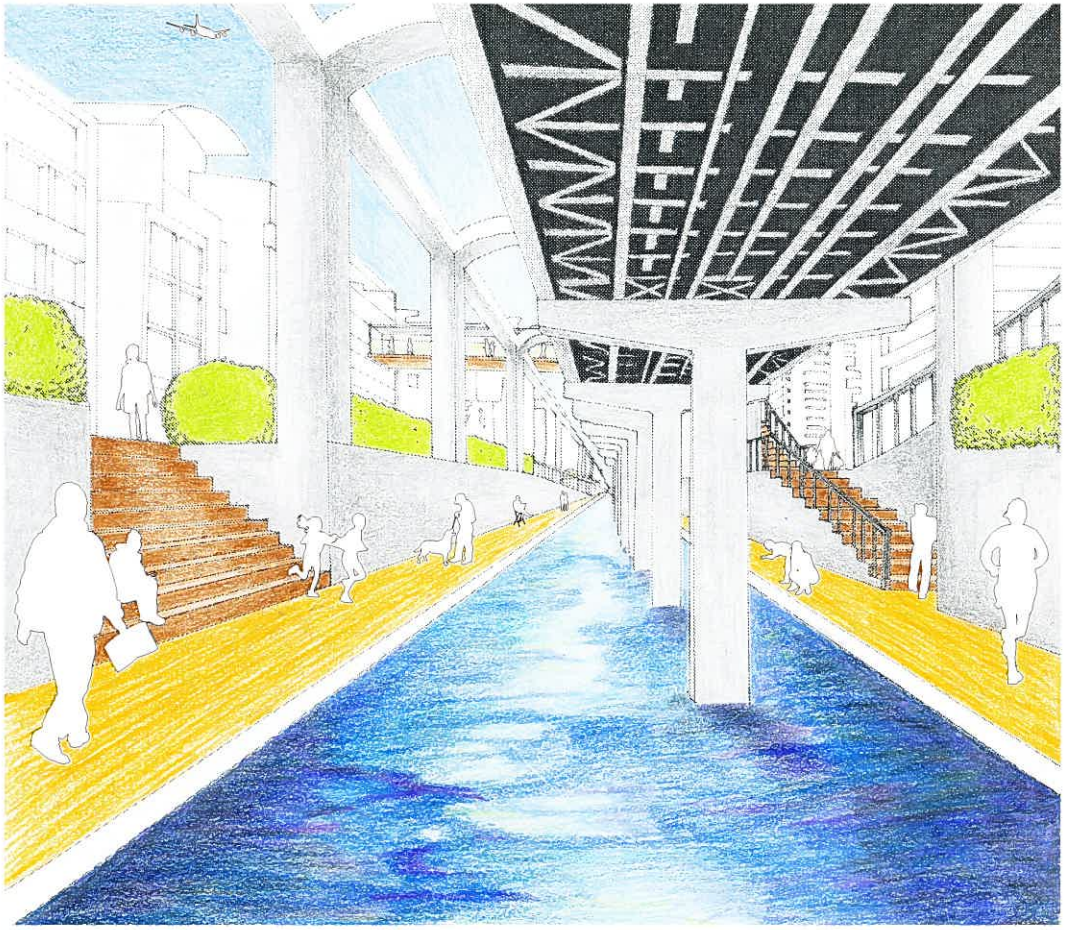
現在は西横掘川は埋め立てられ、その上に阪神高速が通っている。阪神高速の高架橋下はほとんどが駐車場になっている。

また、高速道路東側は高速の際まで中層建築物が迫っており、西側は高速への出入り口のため、幅員の広い道路となっている。 周辺にはあまりまとまった緑が無く、画一的なコンクリートのまちなみである。

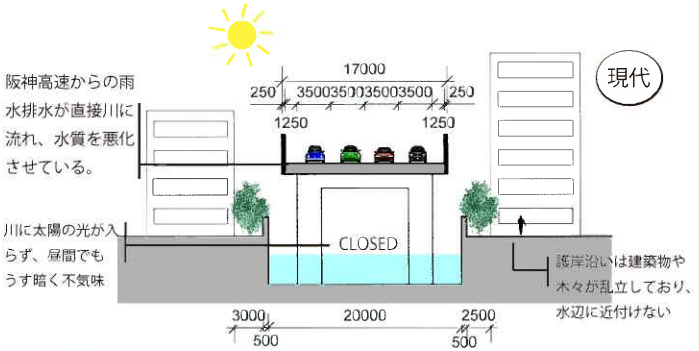
□東横掘川

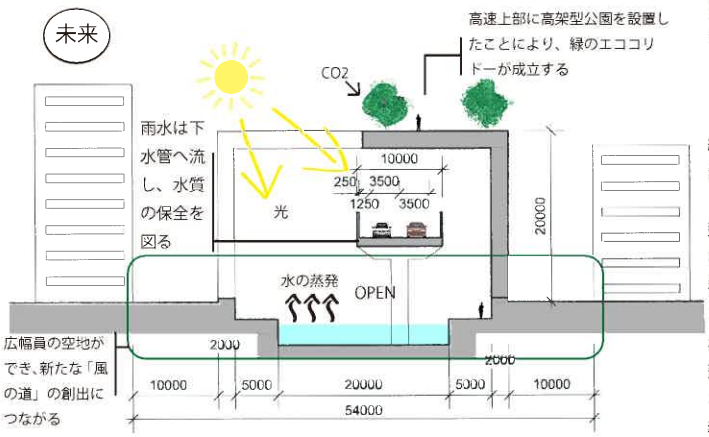
東横掘川は土佐掘川から道頓堀川をつなぐ、幅員約２０ｍの川である。川の上部には阪神高速が建設され、かつ、高速の際まで中層建築物が迫っており、大変暗い。

また、高速道路からの雨水排水が直接川に流れ込むため、水質環境は良好とはいえない。近年、東横掘川を再生しようとするプロジェクトが動き始めている。



■ヒートアイランドの緩和策





1.「フタ」をあける

現在、東横掘川・旧西横掘川の上部には阪神高速が４車線で建設されており、川にフタをしている。

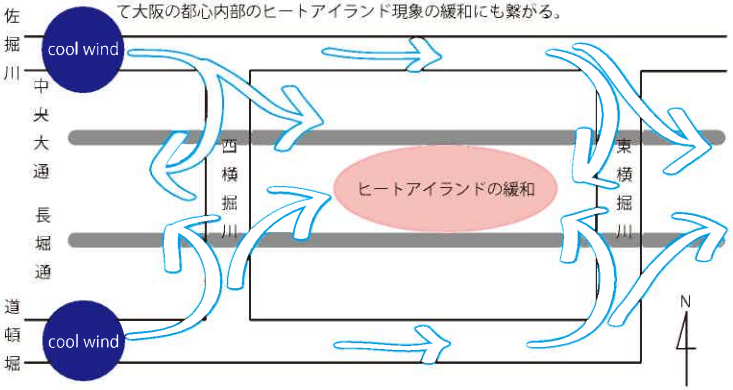
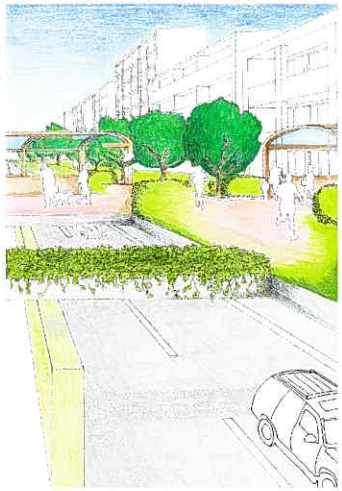
しかし、近年、我が国は人口減少時代に突入し、かつ、若者の「車離れ」が進み、必ずしも移動手段が自動車である必要はなくなってきた。

そこで、必要最低限の交通量をさばくため、阪神高速を２車線に減築し、川を覆っている「フタ」をあけることによって、水辺に光を届け、大阪の新たな親水空間を創出し、ヒートアイランド現象を抑制することを目指す。

2．緑の回廊を創る

江戸時代、大阪のまちなかには、川が縦横無尽に流れていた。現在は阪神高速がまちなかを縦横無尽に流れている。

そこで、減築した阪神高速の上に高架型公園を回遊させることで、連続的な緑を創出することを考えた。人々は大阪の都心部にはあまり見られない連続した「緑」に癒され、人、風、時間の新たな「流れ」を生む場である高架上の公園を歩く。連続した緑は CO_2 を吸収し、ヒートアイランド現象の緩和を大阪の都市全体に導いてくれる。

■新たな風の道の創出

西横掘川を再生させ、東横掘川周辺を広幅員の空地にすることで、南北軸に新たな「風の道」が生まれる。また、西横掘川と東横掘川の両側から流れてくる涼しい風によって大阪の都心内部のヒートアイランド現象の緩和にも繋がる。